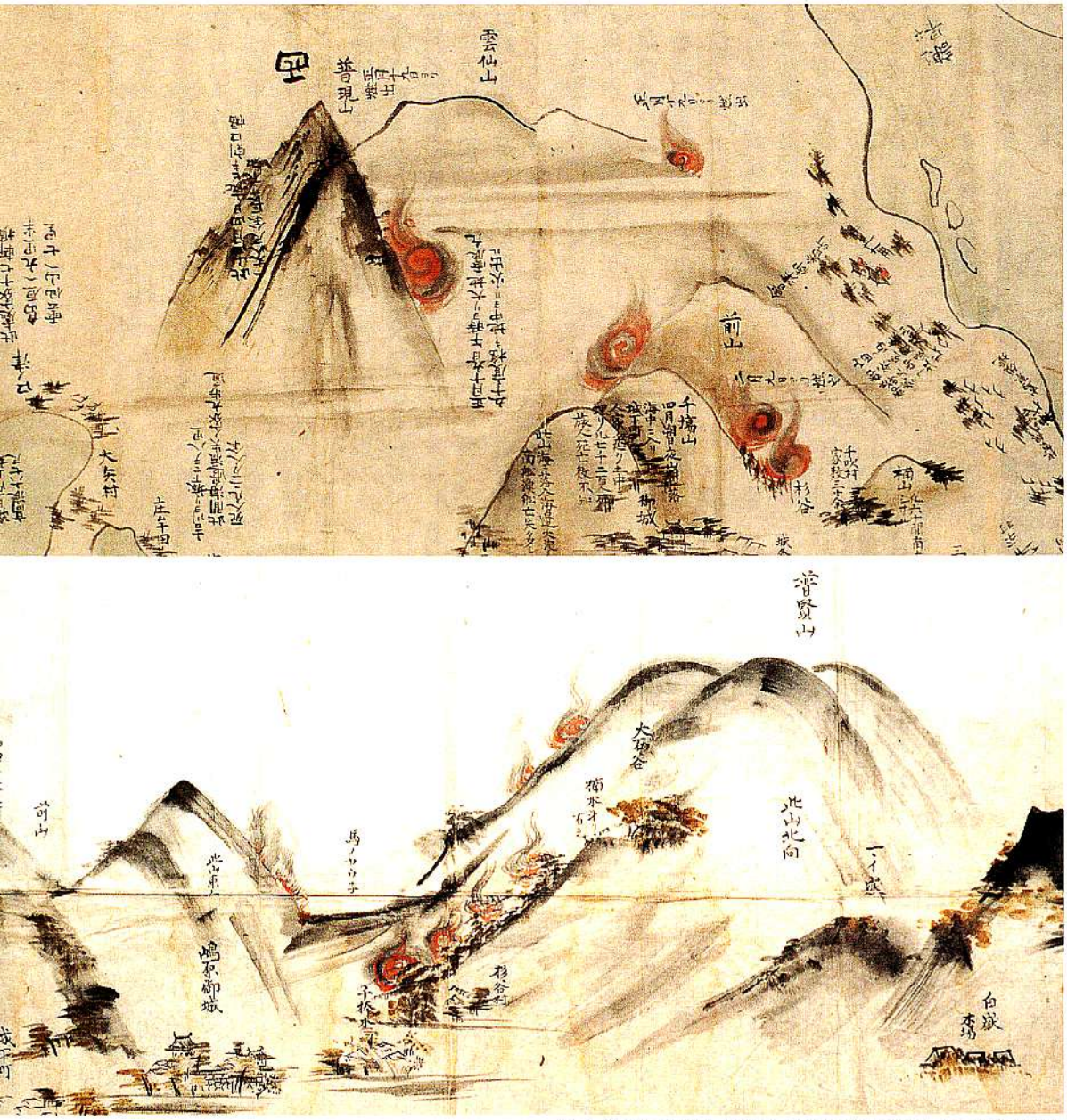
対馬歴史民俗資料館報

第 19 号
平成 8 年 3 月25日

編集・発行
長崎県立対馬歴史民俗資料館
対馬厳原町今屋敷
郵便番号 817
電話 (09205) 2—3687
印刷所
長崎市栄町 6 —23
昭和堂印刷
電話 (0958) 21—1234



〔上〕「島原大変図」（仮題）〔下〕「嶋原之図」（いずれも部分）

「国境の島」から「国交の島」へ

館長　赤木孝夫

平成七年度も余すところわずかになった。戦後五十年ということで、国内ではさまざまな記念行事が催され、国民に歴史認識を促し、将来を展望させる節目の年になった。

本館においては、本年度から学芸担当の常勤職員二名が配置され専門的知見に基づいた調査研究、資料の収集と保存、運営に当たることになった。開館以来非常勤職員による運営だっただけに画期的なことであり、本館の価値が高く評価されてきた証左に他ならない。また史料のマイクロフィルム化のためのカメラを導入し、ハード面も充実した。館にとっても「山が動き始めた」節目の年になった。

本館は、まもなく開館二十周年を迎えるが、鎖国時代における朝鮮との特異な交流によって蓄積された対馬藩の厖大な記録類の系統的な調査研究を初め、考古資料・民俗資料の収集・保存等、対馬の歴史・文化史研究の拠点施設として、ますますの充実を図っていきたい。

折しも、対馬においては、厳原町を中心にした「朝鮮通信使縁地連絡協議会」の発足、美津島町には、「対馬国際・歴史交流会館」の建設決定、上対馬町では、対馬と韓国を結ぶ「高速船あおしお」の就航、各町における「ハングル講座」の実施、中学校の日韓交流活動等、歴史的に関係の深い韓国との交流が、今にわかに活発になってきた。対馬を「国境の島」から「国交の島」にする国際化の動きの中で、本館は、情報発進施設としても、今後一層その重要性が強調されよう。

寛政の島原大変と「島原大変絵図」

—宗家文庫史料—

学芸員　小　松　勝　助

一、平成三年の普賢岳噴火

雲仙普賢岳の地獄跡火口と九十九島火口から、突然噴煙が上り始めたのは、平成二年(一九九〇)十一月十七日未明のことであった。そして、翌十一月十八日付の長崎新聞には、「雲仙岳二〇〇年ぶりに噴火」という大見出しの記事が、低く、白煙がたなびく(第一面)、また空高くまっすぐに二すじの白煙が立ちのぼる(第二十八面)、美しい普賢岳の様子がカラー写真入りで紹介された。

寛政四年(一七九二)の「島原大変」からかぞえて実に百九十八年ぶりに眠りから醒め、白煙をはき、再び噴火活動を開始した普賢岳に、島原市民はもちろん、半島一円の人々は目を見張った。

そして、その後小休止状態を保ったあと、徐々に活発な活動を展開し、ついに、半年後の平成三年(一九九一)六月三日午後三時五十七分の噴火に伴い、普賢岳東側に火砕流が発生、一瞬のうちに四十三名に上る死者・行方不明者、それに多数の負傷者を出す大惨事をひき起こした。

さらに、六月八日には、この大災害に追いうちをかけるようにそれまでで最大級の大火砕流(五・五㎞)が発生水無川流域の家屋七十三棟が焼失した他、その後噴火活動の活発化に伴い、降灰、大雨時の土石流なども頻発し、島原地方は、寛政の「大変」以来の大災害を被ったが、その普賢岳は、噴火活動五年にして今ようやく終息状態を迎えている。

二、寛政四年の島原大変

東西約十六㌔、南北約十五㌔の広がりをもつ雲仙火山群の最高点普賢岳は、標高一三五九・七㍍ある。この雲仙火山群の活動は、ほぼ二十五万年前に始まり、南西部の高岳(標高七七一㍍)火山群、北西部の九千部岳(同一〇六二㍍)火山群、そして、東部に移って普賢岳火山群という順に活動中心が変遷してきたと推定されている[1]が、記録に残る歴史時代になってからの噴煙をあげ熔岩流出を伴う噴火活動としては、明暦三年(一六五七)の噴火(古焼熔岩)と、寛文三年(一六六三)の噴火、寛政四年(一七九二)[2]の噴火(新焼熔岩)等がその代表である。

この内、のちに「島原大変」の別名で呼ばれた、寛政四年の大地震は、前年の十一月三日(旧暦十月八日)、小浜に発生した地震が発端で、漸次普賢岳を中心とした地鳴りや小地震の前兆に引き続き、二月十日(旧正月十八日)の夜半(子ノ刻、午前〇時)、数百の大雷がとどろくような大音響とともに大地震が起った。

一夜明けた、翌二月十一日(旧正月十九日)、「御城内迄も鳴音相聞(きこえ)…今朝(正月十九日)(おびただしき)夥敷煙相見」えとか、「十九日之朝不図も普賢山に煙吹出し其勢ひ大空にも冲(のぼる)へき有様」[4]等と、人々は勢いよく煙をあげ、噴火活動を始めた普賢山に驚いた。その普賢山も、その後は四月二十一日(旧三月朔日)の地震をはさんで、いくぶん平静になり、約七ヵ月続いた大小の群発地震も、やがておさまるかにみえた。

しかし、これこそ嵐の前の静けさで、人々が約半年に及ぶ天災地変から開放されようとしていたころ、五月二十一日(旧四月朔日)、その日は、「終日曇」[5]であったが、酉ノ刻(午後八時)過ぎ、島原を中心に二回の地震があり、その直後、「百千ノ大雷一度ニ落チルガ如ク天地も崩ル、計(ばかり)ノ」[6]大音響と共に、前山(眉山)が大崩壊を起こし、その大量の土砂は麓の町を埋めたり押し流したりしたあと、島原湾(有明海)に注ぎ、ために大津波(火山津波)が発生、島原半島はいうに及ばず、対岸の肥後(熊本領)まで押し寄せ、同地方にも甚大な被害を及ぼす結果となった。「島原大変肥後迷惑」といわれた所以である。

ところで、この夜いったい何が起ったのか誰にもわからなかったが、翌朝になって、「前山の容体を見るに南平半分は飛(とび)て、海中に幾千となく小山を築(きずき)、市中変じて山と成り川と変じ、以前の様子は聊(いさゝか)なく」[7]なっていたのである。

この普賢岳噴火、前山崩壊による土石流と海からの大津波襲来という二重災害によって死んだ人の人数等については、記録によってまちまちであるが、最も信憑性のある記録とされる島原領主松平主殿頭忠馮(まつだいらとものかみただより)が幕府へ提出した被害届及び熊本領の被害届からの算出では、死亡者の人数は一万四千九百二十人になるという[8]。つまり、死者は一万五千人前後とみられ、日本最大の火山被害ということになる。両被害届にあげられた死亡者の内訳は、島原が九千九百二十四人、有明海を隔てた天草郡の溺死者三百四十三人、熊本領の流死者四千六百五十三人であった[9]。「島原大変」による犠牲者、約一万五千人の内三分ノ一は、対岸熊本領の領民がまきぞえになったことになる。正に「肥後迷惑」だったのである。

三、宗家文庫史料の「島原大変絵図」

宗家文庫史料の中に、「島原大変」

に関する絵図が二枚ある。この二枚の絵図について、若干の所見を述べれば次の如くである。

【A】「島原大変絵図」(仮題)

(縦)一一三㎝×(横)二〇七㎝

(1) 料紙中央上部に大きくなだらかな山を描き、これを「雲仙山」とし、その左(南東方向)に屹立する「普賢山」を描く。「前山」は、雲仙山と普賢山の右手前(北東側)に、北峰・中峰・南峰の三連山で描く。

(2) 丸い塊になって、炎をあげながら流れ下る熔岩流は、普賢山の北側に一塊り、三連する前山の一番奥(北西側)の中腹に一塊り、同じ山の手前側(東側)に二塊りが描かれるが、そこはもう杉谷村で、熔岩流は、この村を襲ったように描かれている。熔岩流のもう一塊りは、雲仙山の北側に描かれている。

(3) 絵図に収められた、地理的な広がりは、まず横長の料紙の中央部分上部(西側)に普賢山を配し、その下方(東側)には、有明海をはさんで天草をはじめ長洲・三角方面(熊本領)までを、右(北側)は柳川・三池方面(筑前)まで、左上部(南西～南側)は口ノ津・早崎・小浜の南高から、茂木・脇津の長崎半島までと、かなり広範囲に収める。

(4) 村ごと・入江ごとに、高波(津波)の高さや死者数を記入している。

(5) 絵図は熔岩流を赤と黒で、山海などを淡い水色で着色している。

【B】「嶋原之図」

(縦)六十㎝×(横)一三一㎝

(1) 料紙右下を北、左上を南にする。右端(北)に「アイヅ村御番所」とある。

(2) 「普賢山」を中央に描き、その左(南側)に、「前山」を北峰・南峰の二連山で描く。二つの前山のうち、普賢山に近い方(北側・北峰)の手前麓に、「島原御城」を配し、南側の麓に城下町を配する。

(3) 熔岩流は、普賢山の左側(南側)の斜面(「大石谷」、楠木斗有之)を流れ下り、千本木地区に迫っている。

(4) 熔岩流のもう一つの流れは、普賢山に近い方の前山(北峰)の北側斜面に描かれている。

(5) 前山頂上部付近に描かれている墨書、「嶌原嶽、此所四月朔日ノ晩サン〳〵崩ル」

四、本絵図が作られた時期

宗家文庫史料の中には、日記や記録類の他、府中・郷村・田代・江戸・長崎などの「地図・絵図類」がある。そのうち、「島原大変」関係の絵図は二点あるが、これらがいつ、何のために、誰によって描かれたのかについて、詳しい事情はわからない。ただ、「御在国毎日記」(寛政四年)に、「島原大変」に関する次のような記録がある。

(寛政四年)
五月廿日　雨天

当番
日帳番　立花五助

「御在国毎日記」(江戸)寛政四年五月廿日条

肥前島原松平主殿頭(まつだいらとのものかみ)様御領内雲仙山、普見山と申硫□(黄)[illegible]、当正月十九日、火吹□(出)、地震□(鳴)動強□、(人民多く逃去候程ニ有之、追ヽ)□相鎮り候処、又□(一四月朔日ヵ)地震鳴動強□、御城ニ近キ前山と申高山頂上ヵ根方迄一時ニ割落、御城下町家ニ落掛り、人家残□少く土中ニ埋り、海中ヵは高浪打上り鳴原御領は勿論、天草・肥後御領ニ掛ケ津ゝ浦ゝ人家流亡、溺没之者夥敷(おびただしく)、或は溺死、或は焼失、破船等ニ而溺死之数等委細不相知候処、先只今迄御吟味相済候分弐万七百人、肥後御領ニ而、弐千四五百人程之由、今以御城下近辺之山焔火盛ニ有之、此上如何之大変ニ候段、委細絵図面ニ仕立、田代役大浦主税・永尾儀兵衛ヵ注進来ル、

これによると、島原領雲仙山の地震に伴う災害は、これ以上どのような「大変」になることやら予想もつかない「稀代之大変」であるので、絵図面に仕立て田代役の大浦主税と永尾儀兵衛が江戸藩邸に届けたという。

本絵図は、その時仕立てられた絵図もしくは、その「御国控」であろう。管見の限り、この記録の他には、該当年月日前後の他の日記類に、本図作成に関する記録は見つけることはできない。もちろん、絵図そのものにも作成の時期や作成者の記録がないので詳細は明らかではないが、本絵図は、本毎日記の「絵図面ニ仕立」てたという、その絵図(またはその控)とみてさしつかえないと考える。

さらに、絵図の随所に短いデータが記入されているので、本図を描いた人物は、現地に赴き詳しく調査を進めながら描いたにちがいない。したがって、本絵図が描かれた時期は、日記の内容から察するに、寛政四年(一七九二)四月朔日の噴火以降、五月廿日迄の間ということになり、それは、「大変」直後で、まだ島原地方は、混乱のまっただ中にあったころと思われる。

五、本絵図の史料的価値

噴火したのは普賢山で、前山(眉山)ではない。しかるに、

① AB両絵図とも、前山から熔岩流が、流下しているように描いてある。

② 死者の人数については、史料によりまちまちではあるが、A図では、島原方面(千場山)七千二百人、吉川二万人余、肥後(十七ヵ所で)一万千七百人(但し、十四日改めでは、一万七千四十人)と他の史料とは、大きく食い違う数字があがっている。

③ 絵図の描き方としては、幾分丁寧な部分もあるが、全体としては稚拙で、やや組雑に描かれている部分もある。

④ しかし、その一方で、南高・筑前・肥前のかなりの地点における高浪(津波)の高さ(遡上高、また、「西五刻」など津波の到着時刻までも)を記録しているなど、この種の他の絵図には見られない、ユニークな記述も目立つ。

ところで、「島原大変」関係の絵図類は、主なものだけでも、島原地方を中心に、次のようなものが知られている。

a「眉山大崩壊寛政四子年肥前国島原山々燃崩城下町々村々破損ノ図」(東京大学地震研究所所蔵)
b「寛政四年大震」(島原市本光寺所蔵)
c「島原大変大絵図」(島原図書館所蔵)
d「大変後島原絵図」(本光寺所蔵)
e「島原大変前後図」(島原図書館所蔵)
f「普賢岳新焼図」(本光寺所蔵)
g「甲第図」　(　同　)
h「肥前国嶋原津波之絵図」(熊本大学図書館・永青文庫所蔵)
i「嶋原地震図」　(　同　)
j「肥前国南高来郡島原温泉不賢山・前山之図」(九州大学図書館所蔵)

宗家文庫史料の中の島原大変に関する本絵図は、島原地方を中心にしながらも、地理的な広がりを筑前・薩摩境まで入れたり、随所に、高波の高さ(遡上高)を記録するなど、今までに知られている一連の関連絵図類とは違った観点で描かれており、「大変」関係の絵図の中では、若干他と趣を異にした史料として注目されよう。

註

(1)村山磐『雲仙普賢岳大噴火―寛政と平成の記録』一六ページ
(2)同書、一九～二〇ページ
(3)島原仏教会『たいへん』八ページ
(4)東京大学地震研究所『新収日本地震史料第四巻別巻』二七四ページ「島原大変記」
(5)前掲『たいへん』六八ページ
(6)同書、五六ページ
(7)前掲『雲仙普賢岳大噴火』六八ページ
(8)同書、七六ページ
(9)同書、七六～七七ページ
(10)宗家文庫史料「御在国毎日記御国控」(江戸)寛政四年五月廿日条。虫食い部分は「江戸毎日記」(翻刻)により傍注(「新収日本地震史料第四巻別巻」二九三ページ)

(史料)絵図Aの随所にある墨書

(◇印を付した見出しは、墨書のある場所)

◇「普賢岳」付近にある墨書
正月十九日ヨリ燃出、
此山四月夜ヒキ割、口幅一丈八尺余、長サ不知、
正月十九日午時ヨリ大地震、凡五十度揺キ地中ヨリ火出、

◇ロノ津……此處家十七軒損、島原ヘ九里半、雲仙ヘ七里、

◇ロノ津湾内……朔日酉五刻、高浪六七尺、

◇吉　川……吉川ヨリ城下マテ八里、此間海辺流失ノ家九歩通、死人凡二万人、

◇千場山……四月朔日夜崩レ落、海中ニ入、城下町、人家悉土中ニ埋り、凡七千二百人死、旅人死亡数不知、此山海ニ落入、海辺大浪人家商船、漁船亡失多シ、

◇三之沢前の海中……島原城下其他浦ノ図共悉ク無難ノ時ノ図也、
此大変ニ付、町中並ニ漁利潟ト申泊リモ山ノ下ニ成候、
所〻書記シカタシ、新出ノ島ハ荒〻画之、

◇新　島……新ニ湧出ノ嶋大小凡四十三、ソノ中三里マワリノ島、三ツトモニ松生シ有、

◇安　徳(前海)……此泊りヨリ沖中マテ大小船二百艘難船、内二艘ノカル、

◇吉川・庄牟田沖……朔日酉五刻高浪五丈、

◇小　川……此所迄ハ浪濤殊ニ高ク、人家流出、活ル人マレナリ、

◇早　崎……此所今度浪ナシ、

◇(北側)大川口……高浪四尺、

◇柳川～黒崎間の湾……此處高浪七尺、

◇黒崎明神……此處高浪二丈、

◇長洲浜……此處高浪六丈余、

◇長　洲……五ヶ所死人千人余、

◇ナメラ石(長洲)・晒……此両所凡千二百人死、

◇椛島～チカウズ間の浜……高浪七丈余、

◇立　花……此所四五十軒流、死人多、

◇川　内　流家三百六十軒、死五百七十人、

◇長浜沖……肥後海辺十七ヶ所、死人凡一万千七百人トモ、其外熊本ヨリ川尻ヘ出張ノ役人、拠又肥後侯ノ御座船恵丸、新艘ヲロシニテ見物老若右高浪ニテ死人難量、
十四日ニ至り改ノ上一万七千四十人也ト云〻、

◇長浜西(浜、以下天草)……四月二日酉ノ二刻、高浪六丈余、

◇ヤタケ(南)……於此所五十九艘破船、

◇三　角……此所八十五軒、人共ニ不残死、

◇岩　谷(従是、南天草)……廿四人死、

◇栁……七割六十軒ノ内一軒残ル、一人活ル、

◇柳おき……高浪六丈、

◇湯　島……コノ嶋百五十軒、人家トモニ無難、

◇瀬　高……死者三十五人、

◇赤浦沖……高浪三丈余、

◇今　泉……死三十四人、

◇大　浦……死二十九人、

◇筋……死百廿四人、

◇赤　浦……死三十七人、

◇上津浦……死六人、

◇小島郷～本渡間の海中……此所四月朔日、酉五刻高浪二丈余、本戸流家百五十ヨ、死人三十一人、

◇鼠　島……此島今度浪ナシ、

[付記]　本稿を草するにあたり、文献の紹介等につき、九州大学島原地震研究所長・太田一也氏に御教示を受けるところがあった。絵図および小論の本紙掲載を快諾された宗立人氏とともに、記して謝意を表したい。

阿須川の開鑿と義真の町づくり

長郷直明

一、はじめに

厳原中学校グランド東端で、国道のトンネル取付け工事が始まった。この対馬一のトンネルが完成すれば地域住民の生活向上に多大の恩恵を与えることになるだろう。私が阿須川に関心をもつようになったのは、桟原に居住し、毎日阿須川を眺めながら散策を行うようになってからである。この川は、両岸には大小の樹木が繁り、澄んだ川底にはいろいろな形をした大小の自然石が転がっている。また初夏は藤の花、秋には青白い光を放つ県指定天然記念物アキマドボタルの生息地としても知られている。総延長一六〇〇m余りの小河川ではあるが、雨期になると水量は急激に増え、水しぶきをあげながら濁流となって阿須湾に注ぐ。この阿須川は、江戸時代初期、宗義真の時代に丘陵を掘り切って建設された人工河川である。

二、阿須川の堀切

江戸時代の初めまでは、有明山・柳ノ壇山・佐須峠等を源流として流れ下る大多羅川と、上見坂・権現山等を源流とする知首川の水流が合流する砥石淵川は、府中の町中を流れていた。その川筋は、袖振山と成相山の谷間を蛇行しながら成相山の西側の山際に沿って流れ桟原の前に流れ出た。さらに東方に曲り、今馬場より大手前へ出て、小学橋から現在の川筋の通りに流れ下って府中湊に注いでいた。砥石淵川は、背後に有明連山等の大きな山があり、雨天になると急激に水嵩が増加した。それで府中の町では大雨の時には、川から水が溢れ出し馬場筋でも大洪水になるため、住民は長い間水害で苦しめられていた。[1]

そこで、宗義真は洪水防止のため阿須川の堀切工事を実行した。万治二年（一六五九）、国府界平の前の隈を掘り切って、川の水流を砥石淵の東側の阿須湾に替えた。これが今日の阿須川である。[2] これによって国府界平と呼ばれる丘陵地域は、完全に賀部岨と切り離されることになり台地化されてしまった。[3]

この堀切工事は、藩士山川某らが釜山の倭館で犯した罪の罰として、また豪商・古森惣兵衛が潜商で利潤を上げた罰として工事をしたとも伝えられている。特に古森惣兵衛は、土木工事に勝れた人物で、この堀切工事では、僅かに山の左右や山岳の中間を堀り開いただけで、雨天時の水流を活用してこの工事を完成させたという。[4] この後、砥石淵川の本流は東方の阿須へ付け替えられ、阿須川となった。この阿須川の堀切で、府中の洪水の大被害はなくなったという。[5] 昔の砥石淵川筋は、砥石淵の広い道路付近にあたるらしい。[6] 上流の砥石淵には堰を築いて小砥石淵川をつくり分水した。現在もその機能は生きている。

三、宗義真の政治

阿須川の堀切工事を実行した宗義真は、明暦二年（一六五六）二十歳で家督を継いだ。その治世は約四十年の長期間であった。寛文の諸改革の実行等その業績は見るべきものが多かった。その中でも、対馬支配の拠点として、国府界平の台地上に桟原城の建設を始めたのは、阿須川工事の完成の翌年、万治三年（一六六〇）のことで、約十九年間の歳月をかけて完成した。この城は天主閣がなく、建物は公家風の屋形であり、阿須川を自然の壕とした。軍事的な築城というより、むしろ政治的な意味をもつものであった。そして、府中の町づくりはこの城を中心に進められた。

その他、大船越瀬戸の堀切、佐須奈関所の開設、お舟江の構築、府中湊のやらいの構築、草梁倭館の新設、小学校の開設など、数々の土木・文化事業を行っている。[7] それに朝鮮貿易や銀山経営等が成功したので藩の財政も豊かになった。

このように、宗義真は多方面にわたり、自らの構想を次々と実現し、この時代の指導者としてその力量を十分発揮することができた藩主であった。宗義真の治世は、藩の基礎も固まり、文武両面にわたって、正に、その全盛期を迎えたのである。

四、おわりに

阿須川の堀切工事は、単に府中の度重なる洪水の解消だけが目的ではなく、宗義真には「府中の町づくり」というもう一つの重要な構想があったのではないかと考える。それは、阿須川の完成の直後から桟原城の建設、馬場筋の大通りを中心とする道路の整備、武家屋敷の造成等が積極的に進められ、近世城下町としての町割が行われた。特に府中の町づくりは道路の建設に特色がある。府中の中心道路である大通りは西の浜の船着場から桟原城まで直線的に建設されている。これは、人々に朝鮮国の使節団である通信使の大規模な行列を見せ、藩主の権威を誇示するためでもあったと思う。

宗義真の町づくりは、対馬藩と朝鮮国との善隣外交を推進するためにも重要な役割を果たしたのである。

註

(1)鈴木棠三編『閑窓独言』三九ページ
(2)同『津島紀事(上)』二一四ページ
(3)同『閑窓独言』三九ページ
(4)同『対馬人物志』一一三～四ページ
(5)同『対州編年略』二七三ページ
(6)同『津島紀事(上)』二一四ページ
(7)対馬教育会『増訂対馬島誌』四一五ページ

大浦忠左衛門「下知之書」にみる

畠木庭の管理について

瀧本啓美

府中在住で代々宗家に仕えた薦田家旧蔵の蔵書の中に、『大浦忠左衛門殿御支配之節八郷畠木庭水損無之様下知之書』という覚書がある。（墨付八丁、同家文書目録は本館報第十八号、本「下知之書」はそのB―二）。

大浦忠左衛門は貞享四年（一六七八）六月朔日、大浦成勝の跡を継ぎ（『対馬人物志』二五九ページ）、第二十一代宗義真の時藩に出仕（『御馬廻御奉公帳』与頭B―2）、以来六十余年にわたって、義倫・義方・義誠・方熙・義如と六代に仕え、藩内でも指折りの家臣団の一人である。江戸に上ること十回にも及び（『奉公帳』）、その中の正徳元年（一七七一）と享保四年（一七一九）の朝鮮通信使来朝の折には、雨森芳洲らと共に江戸まで使節に同行している。

「下知之書」については、調査不十分な点と、紙面の都合で全てを紹介できないが、その内容は、畠木庭を水損より守るための施策について、八郷の奉り役に下知した、いわば畠木庭の管理の心得書である。忠左衛門の一般的な畠木庭論によれば、

① 川沿いの畠では、畠を広めるため小竹の枯れ根を取り除くと、川岸の浮土が流れ水損がひどくなる。

② 猪荒がなくなったあと、木庭床への耕作が多くなり、土砂の流下が増し、水はけの溝を掘っていないことから起こる害も増えた。

③ 作物は川縁まで作らず、畠の端には土どめの木の棚を作ると共に、小竹や柳の植付けを勧めたあと、

④…村下知人・肝入・頭百姓差寄詮議之上ニ而、宜キ程を村中ニ致差図、村下知人ハ折〻其村領之川筋并木庭を立廻り、申聞置候通りニ仕候欤、仕不申候欤を見届、油断仕居下知人ニハ、急度致催促候得…と申し渡し、村の役人のあり方についても言及している。

最後に、岸抜け水損については、何れの時期、何れの国郡においてもあることとしながらも、

⑤…天災之外ニ耕作仕ル者共之仕形不宜所ゟ起り候…又奉役、村下知人之勤方も一様ニハ無之…

⑥…前〻條之趣を八郷之奉役・下知人惣中ニ申渡候而…御巡検之前後ニ検使を被差下検分可被仰付候、

⑦…不図検分申付、川端之作所之際木、木庭之床之際木を下知之通りニ建置不申候可、又ハ際木之外作物を仕付不申筈之所ニ仕付置候可を見届させ…

⑧…御巡検後ニハ際木之外ニ小竹之根を植付置不申候可、又木庭之くほミ、水筋の所ニ作物を仕付置候可、水遣り之溝を堀り不申可を右之格ニ而段〻見届ケさせ可申候…

「此趣も八郷江申渡可被置候」と具体的に、しかも厳しい対応のあり方を示している。生産の安定を図るための当時の農政の一端を知ることができるように思う。

ところで、大浦忠左衛門が郡支配の職を辞するに当たり、彼の信任の厚かった陶山訥庵に委嘱して成ったものに『老農類語』がある。忠左衛門は依頼に当たり「八郷の老農がみずから体得した農事の要領を明白にして、村々の怠けがちな農民に村下知人から言い聞かせるのに便利な教本を編集してもらいたい」（同書序）とその意図するところを述べるとともに、八郷の老農の広い知識と豊かな経験を取り上げる理由についても詳細に述べている。

従って、『老農類語』からは当時の各郷での農政について具体的な施策を知ることができるが、『老農類語』を「下知之書」の延長として捉えることは早計であろうか。

八郷から選ばれた老農の諸説と、「下知之書」の内容があまりにも似ていることにその感を強くする。

短通

1、本館所蔵の文書史料のうち、虫害等破損のひどい「江戸毎日記」（御国控）などについては、平成四年度より随時裏打ち補修を行っており、書簡類の調査と並んで館の大きな事業の一つになっている。

（上）裏打補修前　（下）裏打補修後
（「御在府中毎日記」享保２年８月２日条）

2、最近十年余の入館者数の推移を三年度ごとにみてみると、

昭和	六十　年度	七、七九四人
同	六十三年度	一〇、八八〇人
平成	三年度	一二、一〇二人
同	六年度	一二、二四六人

となり、年々増加している。

3、入館者は、遠くは、北海道や外国からもある。多くの時間を費やして訪れる人々の対馬観光の土産に、もっと平易な解説で、より面白い歴史史料が見せられるよう、工夫をしていきたい。

（藤崎利明）

平成七年度職員

館長（兼務）　赤木孝夫　学芸専門員　長郷直明
課長（同）　永留保幸　研究員　藤崎利明
主査（同）　高原重光　同　瀧本啓美
課長（学芸員）　小松勝助　事務嘱託　椎葉徳子